参考文献・注記

第 1 章参考文献

1. 「逆説の日本史 4 中世鳴動編」井沢元彦　小学館文庫（P355,　P391）
2. 人物伝承辞典（古代・中世編）小野一之他　東京堂出版
3. 放送大学教材「文学　芸術　武道に見る日本文化」魚住孝至（P114）
4. https://app.k-server.info/history/fujiwara_hidesato/
5. 「阿修羅の西行」三田誠広　河出書房新社 P44
6. 人物叢書「西行」目埼徳衛　吉川弘文館　（P12-16,P28,P34
7. 凡例 / Category:日本の氏族
8. http://www.ktmchi.com/rekisi/cys_37_41.html
9. 『清盛以前－伊勢平氏の興隆』高橋昌明（p13～14）
10. https://akira.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=878&item_no=1&attribute_id=19&file_no=1 渡邊朋夫

１１．https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013169/explanation/otogi_12
京都大学アーカイブ「西行物語」

第 2 章参考文献

1. 「阿修羅の西行」三田誠広　河出書房新社（P32、P42、P99）
2. 『鎌倉文化の思想と芸術　武士・宗教・文学・美術』田中英通著　勉誠出版
3. http://www.intweb.co.jp/saigyou/sayonakayama4.htm
4. http://www.photo-make.jp/hm_2_1/saigyou.html
5. 「藤原秀衡　公権を握った北方の王者」岡田清一筆
6. 人物叢書「西行」目埼徳衛　吉川弘文館　（P12-15,
7. 「西行花伝」辻邦生　新潮社
8. http://www.intweb.co.jp/saigyou/syukke3.htm
9. 秋田高専研究紀要第 41 号「武士道を探る－「武士」の誕生から江戸時代まで」渡邊朋雄
10. ＷＩＫＩ　武芸
11. ＷＩＫＩ　蹴鞠
12. 「古武道の本」（秘伝の奥儀を極めた達人たちの神技）学研
13. 「古神道と古流武術」大宮司朗・平上信行　八幡書房　（P192）
14. https://japanese.hix05.com/Saigyo/saigyo2/saigyo203.after.html
15. 「密教の本」―秘儀・修法の世界　学研（P122P、P120P、P18、P162）
16. 「西行」高橋英夫著　岩波新書
17. 「日本の仏教」イーストプレス社　（P75、P73）

18. http://www5e.biglobe.ne.jp/~occultyo/jujutsu/sennsoujujutu.htm （呪術）
19. https://blog.goo.ne.jp/siroi_1956/e/32f0fcb0f80b43dc03338189c5693fa7
20. 「マンダラ紀行」森敦
21. 西行と修験道：http://www.intweb.co.jp/saigyou/kouyasan3.htm
22. 「逆説の日本史４ ―ケガレ思想と差別の謎」井沢元彦　P300
23. http://www5b.biglobe.ne.jp/~karate/html/sub_html.htm/study-busido/rekishi-4.htm

第３章参考文献

1.「般若心経」小学館　中村元監修（Ｐ１１３）
2.あらすじとイラストでわかる「日本の仏教」イーストプレス（P93、P87、P90、P91、P93）
3. 文学歴史 “平家物語を歩く” JTB 出版
4. 「西行研究録」川田順、創元社
5. 「西行」高橋英夫著、岩波新書
6. 「密教の本」学習研究社（Ｐ１６２）
7. 「西行」目崎徳衛　人物叢書　（１０２Ｐ）
8. https://japanese.hix05.com/Saigyo/saigyo3/saigyo408.hokekyo.html
9. 「眠れないほど面白い空海の生涯」由良弥生　三笠書房（Ｐ６７、Ｐ８３、Ｐ７６）
10. 平凡社世界大百科事典第２版
11.（コトバンク神仏習合）
12.『うたげと孤心 大和歌篇』大岡信著（集英社）
13. http://d.hatena.ne.jp/orion-n/20090517
14.『新日本古典文学大系 11』p.548
15. NHK 古典講読「西行をよむ」No.23 「月の歌」 西沢美仁
16. https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013169/explanation/otogi_12
17. https://japanese.hix05.com/Saigyo/saigyo2/saigyo204.ise.html
18. http://indochina.web.fc2.com/sanukihp/okayama/hkojima1.htm
19. https://www.saigyo.net/saigyo/html/yukari.htm
20. http://www.intweb.co.jp/saigyou/syukke3.htm
21.「西行法師の宗教観」三村功晃　雑誌「真実心」京都光華女子大学（P16、Ｐ３５）

注記（３－６）紀の国と伊勢の関係：

紀の国は、西行の生まれ地の和歌山であり紀の国と伊勢とは古代から深い関係があった。紀の国は古代から昔クス・スギ等の良材の産地で、これを利用した造船技術が発達し、紀州独特の大型構造船の製造地であり、紀ノ川河口には、多くの古墳群や遺跡があり、瀬戸内海から紀伊水門を門戸に紀ノ川を溯って大和に入るルートが、大和と朝鮮を結ぶ重要な幹線

であった。特に「鉄」の輸入とその輸入路の支配が日本統一の源泉だった大和王権にとっては生命線で、数多くの渡来人や文物がこの道を通って大和に入り、大和王権を支えた。 紀ノ川河口に本拠地を持ち、優れた航海術と交易により 大陸・朝鮮半島諸国との交流網をつくり、大和王権の外交・軍事の一翼として活躍したのが、紀ノ川の河口を押さえる紀氏であり、葛城に本拠を構える葛城氏 であった。有力豪族である紀氏が支配していた。この丘陵地の直ぐ下の平地部にある日前宮は日本書紀にも載る一番古い神社の一つで、紀氏が代々祭祀を行ってきたといわれる。記紀神話では、紀氏の祖神とされる天道根命（あめのみちねのみこと）が、天孫降臨に先立ち、饒速日尊（にぎはやひのみこと）に従って、二種の神鏡とともに地上に降り立ち、神武天皇即位の後、紀伊國を賜り初代の国造に任命された。造船の初めから出航に至るまでの過程に関与する神と推察されているが、「これらの神を奉斎する在地勢力を統率した紀直が、武内宿禰麾下の水軍として編成し、神功皇后の新羅出征に従ったのであろう」という。

日前・国懸神宮（2 社で 1 社）は、紀伊国一の宮伊勢神宮に並ぶ準皇祖神として、12 世紀後半には事実上の一宮であった。紀氏は和歌山県にある日前国懸両神宮の社家で、その歴史は古い。紀氏は古代から紀伊国に威武をふるっていた出雲族の王家で『古事記』や『日本書紀』『古語拾遺』『紀伊続風土記』などの記録によると、神武天皇が近畿内平定ののち紀州の国王（国造）に封じられた天道根命の直系子孫である。神話の時代を含めると、なんと二千年以上もの長い歳月をくぐり抜けて、いまもなお日前国懸の神に仕えている。古代の紀国は、木国であり、また紀氏の国でああった。紀氏が神話の世界から歴史のうえに足を踏み出してくるのは、大和朝廷から紀伊国造に任じられてからである。以来、紀氏は紀ノ川流域に形成された豊穣な農耕地帯を押さえて、政治活動を繰り広げてゆく。また、紀州沿岸から瀬戸内海におよぶ海人集団（水軍）をもその配下に掴んでいた。紀氏が大和朝廷のなかで、異例とも思える発展をみせるのは景行天皇の三年、天皇の命を受けて紀伊国の阿備柏原に赴いた屋主忍男武雄心命と紀伊国造菟道彦の娘、影媛とのあいだに生まれた武内宿禰を始祖とする武内流紀氏が大和朝廷の中央貴族として根を張り枝を広げるようになった頃からである。大和朝廷にあって、新羅との戦いに紀大磐らが活躍し、大磐は新羅と戦いながら、任那・高麗の地を股にかけて勢力を蓄え、ついには神聖王を称した。大磐の率いる軍は百済王の軍兵を打ち破り、大和政権からは謀叛と受け止められ、大磐は朝鮮半島でその生涯を終えたという。 まさに、壮大な野望に身を委ねた古代の武人であった。西行の実家佐藤氏は、紀伊国北部の紀ノ川の中流にある「田仲庄」という荘園の預所であった。豊かな稲作地帯であり、西行の財力のバックアップは佐藤氏の荘園領主としての収入から得られたものであった。佐藤氏と紀氏との関係は不明であるが、地理的な近距離からの親密な関係と思われる。

第 4 章参考文献

1. 放送大学教材「道を極める－日本人の心の歴史」魚住孝至 （Ｐ１１９）
2. 「西行花伝」辻邦生 新潮社（P123、343、398、418、427）

3. 放送大学教材「文学　芸術　武道に見る日本文化」魚住孝至
4. 和歌の解釈と鑑賞事典　井上宗雄、武川忠一編　笠間書房
5. 「西行」目崎徳衛　人物叢書　吉川弘文館　（Ｐ８０、Ｐ８６、Ｐ８８、Ｐ４３）
6. （wiki　西行）
7. 「日本思想史における宗教的自然観の展開」家永三郎
8. https://dokushojin.com/article.html?i=403
9. 「西行法師の宗教観」三村功晃　雑誌「真実心」京都光華女子大学Ｐ３８
10. 「西行」白洲正子　新潮文庫 p146-147
11. http://onagigawa.blog.fc2.com/blog-entry-112.html
12. http://wakayama-rekishi100.jp/story/073.html
13. https://www.westjr.co.jp/company/info/issue/bsignal/09_vol_124/feature03.html
14. https://rekijin.com/?p=27647
15. http://wakayama-rekishi100.jp/story/073.html
16. 「西行研究」関口静子　放送大学修士論文
17. 「幽玄とあはれ」大西克礼　岩波書店　P107, P108
18. 「新古今歌人の研究」久保田淳　東京大学出版会

注記（4-6）那智

白洲正子は西行の宗教観について「西行」のなかで那智における西行の歌について次のように書いている。「那智の滝は、滝そのものが御神体である。・・・・　西行は那智に籠っていたのに、滝については一言も語らず、その周辺のことしか歌っていないのは、神は礼拝するもので、触れてはならぬという信念に徹していたのであろうか。

　何事のおはしますをば知らねども　かたじけなさの涙こぼるる

この歌は伊勢で詠んだと伝えるが、実は西行の作かどうか疑わしい。それでも昔から西行の歌と信じられて来たのは、いかにも彼らしい素直さと、うぶな心が現れているからだろう。その柔軟な魂が、熊野三山の神秘にふれて、ゆれ動かずにはいなかったと思うのに、本宮でも新宮でも、そういう歌は一つも遺してはいない。そこに私は、西行の信仰の姿を見る思いがする。西行は、天台、真言、修験道、賀茂、住吉、伊勢、熊野など、雑多な宗教の世界を遍歴したが、「かたじけなさの涙こぼるる」ことだけが主体で、相手の何たるかを問わなかった。「かたじけなさの涙こぼるる」では、詩歌以前の感情だし、歌にすることをむしろ避けて通ったのではあるまいか。西行の信仰のあいまいさは、そこから来ているので、ほんとうは当時の誰よりも神仏を崇敬していたのではないかと私は思う。」

　筆者は白洲氏の見解にやや異論をはさみたい。彼のパトスは単純な出家、修業の枠に縛られないものであり、修業と脱枠との激しい相克があった。高野山に住み憂かれて、伊勢の山寺にまで分け入っていることからも伺い知れる。

第 5 章参考文献

１．人物叢書「西行」目埼徳衛　吉川弘文館　（ｐ５１、Ｐ５５、P57、P69）

２．「挿絵とあらすじで楽しむお伽草子」第 12 話西行物語（京都大学アーカイブ）
https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013169/explanation/otogi_12

３．「西行論」（吉本隆明著　講談社文芸文庫）

４．「西行花伝」（P314）

５．「椒庭秘抄－待賢門院璋子の生涯」　角田文衛　朝日選書

６．https://japanese.hix05.com/Saigyo/saigyo2/saigyo212.josai.html
（西行を読む：上西門院）（待賢門院の死）（天野の尼たち）

７. WIKI 待賢門院堀河

８．http://sanka11.sakura.ne.jp/sankasyu3/42.html

９．http://www.intweb.co.jp/saigyou/syukke3.htm
佐藤義清(後の西行)の出家

１０．五来　重『増補ー高野聖』角川書店　174 頁

１１．放送大学教材「道を極める」魚住孝至 P56

１２．文覚と西行：西行伝説　（続壺齋閑話）
http://blog2.hix05.com/2017/05/post-3172.html

１３．高橋 英夫 「西行 」岩波新書

第 6 章　参考文献

１．人物叢書「西行」目埼徳衛　吉川弘文館

２．「西行花伝」

３．「挿絵とあらすじで楽しむお伽草子」第 12 話西行物語（京都大学アーカイブ）
https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013169/explanation/otogi_12

４．以下ネット
http://blog2.hix05.com/2017/03/post-3052.html
http://www.t-aterui.jp/yamagata/y-takiyama.html
https://japanese.hix05.com/Saigyo/saigyo2/saigyo213.koya.html
https://www.westjr.co.jp/company/info/issue/bsignal/09_vol_124/feature02.html
https://www.westjr.co.jp/company/info/issue/bsignal/09_vol_124/feature03.html
https://www.westjr.co.jp/company/info/issue/bsignal/07_vol_115/feature01.html
http://www.hongutaisha.jp/digest/
http://www.mikumano.net/setsuwa/gotoba.html
http://www.mikumano.net/uta/saigyou.html
https://www.westjr.co.jp/company/info/issue/bsignal/09_vol_124/feature01.html
https://tabi-mag.jp/na0320/

http://d.hatena.ne.jp/orion-n/20090517
https://japanese.hix05.com/Saigyo/saigyo2/saigyo204.ise.html
https://mananavi.com/西行と定家
http://www.intweb.co.jp/saigyou/sayonakayama4.htm
https://www.westjr.co.jp/company/info/issue/bsignal/09_vol_124/feature03.html

第 6 章注記

（注 1） 京都洛北郊外の大原から比良山に抜ける山道が現在もある。花背峠が途中にある美しい山道である。鞍馬・貴船から続いている山道である。花見峠を過ぎると比良山に一気にのぼることができる近道である。筆者は約 50 年前、学生時代この山道を登って比良山山頂近くにある大学のワンゲル部のヒュッテに通った。現在はロープウエイなどで俗化されているが、琵琶湖側から比良への登山道とはまるでことなる人跡の少ない登山道であった。寂然とともに西行は二人でこの山道を登って歌を作ったと考えられる。俗界を忘れさせてくれる清涼の景色を楽しんだに違いない。京都北山の一部である。史跡は残されていないが修験者の利用する道である。西行もこの山道を通ったのではないかと思われる。

（注 2） 西行の白川の関には、遊行柳の歌もある。

“道の辺に清水ながるる柳蔭　しばしとてこそ立ちとまりつれ（新古今集 262）”

謡曲「遊行柳」にある話で、遊行上人（一遍上人）が諸国巡歴している時、白川の関のあたりで老婆に呼び止められ、「道の辺に清水流るる柳かげ」と詠んだ銘木の柳の前に案内され、そのあまりに古ぼけた様子に上人が 10 回念仏を授けると老婆は消えた。夜更けに、上人が回向すると再び老婆が現れ、極楽往生できたことを喜び、そのお礼に幽女の舞を舞う」というものである。

（注 3）「西行物語」には、みちのくへの旅の途中の東国にある天竜川の渡し舟の話がある。天竜川で武士の乗った渡し舟に西行と同行の僧が乗ろうとしたところ、船が沈んでしまうから降りろ降りろと武士に言われた。西行が知らぬふりをしていると、武士が西行の頭を鞭で打ったので、西行は少しも恨む景色を見せず、手を合わせて船から下りた。その時に同行の僧が西行に批判めいたことを言うと、西行はその僧をたしなめた。

「都を出でしとき、道の間にていかにも心苦しき事あるべしといひしは、これぞかし。たとひ足手を切られ、命を失ふとも、それ全く恨みにあらず。もしいにしへの心をも持つべくは、髪を剃り衣を染めでこそあらめ。仏の御心は、みな慈悲を先として、われらがごとくの造悪不善の者を救ひ給ふ。されば仇を以て仇を報ずれば、その恨みやまず」

この言葉には、もと武士としての西行の猛々しい心の残影と、出家の身として仏に仕えようという意思との葛藤が見られる。

（注 4） 出羽の権現は歴史が古い。崇峻天皇が蘇我氏に弑逆された時、蜂子皇子は難を逃れて出羽国に入った。3 本足の霊烏の導きによって羽黒山に登り、苦行の末に羽黒権現の示現

を拝し、さらに月山・湯殿山も開いて 3 山の神を祀ったことに始まると伝える。出羽三山の修験道には、月山の祖霊信仰が結びついた土着の羽黒派修験以外にも、当山派、本山派の修験も存在し、三修験の修行道場として共存していた。当山派や本山派では、空海や役小角を出羽三山の開祖としている。このうち空海開基説は、真言宗湯殿山派諸寺において唱えられている。空海が諸国行脚の旅を行っている途上、ある川（梵字川）を光り輝く葉が流れてきた。それを拾い上げるとその葉には、大日如来を表す 5 文字の真言が書かれていたため、この川の上流に聖地があると確信して川をさかのぼり、ついには湯殿山にたどり着いたという。湯殿山派諸寺では、湯殿山および空海によって開かれた大網の地を「高野山と対なる聖地」としている。

（注 5）高野山での西行の活動は、三つに分けられる。一つは真言密教行者としての修行。西行は学問僧ではなく、また、密教のほかに浄土教、修験道、本地垂迹説といった雑多な思想を西行が抱いており真言密教に専念した。

二つ目は勧進活動で、これについては、西行が高野山に蓮華乗院を勧進したり、紀州の日前神社造営のために高野山に課せられた費用を免除させたりといった行為をあげて、西行が高野山のために一定の寄与をしたことをあげている。これは、西行の政治的影響力にもつながる話で、西行は後にその力を見込まれて、東大寺の勧進のために第二の陸奥の旅へ出かけている。勧進といえばいわゆる高野聖が連想されるが、西行は高野聖の一群とはかかわらなかったと推測している。

三つ目は、数寄者としての生き方である。高野山と数寄者とがどう結びつくのか、高橋は言及していないが、高野山での西行は、主として歌とともに生きたと推測している。僧には画僧とか匠僧とか専門分野への分化が見られたが、そのうちの一つとして歌僧というものがあり、西行はその代表だったという印象を高橋は持っているようである。

（注 6）平安時代末期、末法思想の広まりとともに浄土教が興隆し、高野山にもその影響が顕著に現れるようになった。この頃、鳥羽上皇の帰依をうけた覚鑁（かくばん）は、密教と浄土教を融合させた独自の念仏を唱えていた。西行が高野山に入った頃は雷火で諸堂が焼失していただけでなく、上皇の篤い帰依を受け急速に勢力を拡大した覚鑁に対して、従来の真言寺院である金剛峯寺や京都の東寺がこれに反発し激しい紛争が続いていた。合戦に及び、敗れた覚鑁は高野山を離れ、保延六年（1140）、根来にあった豊福寺に居を移し、晩年の活動拠点とした。しかしながら確執は深く、その後も対立が続き、鎌倉時代になって大伝法院と密厳院は高野山から根来に移され、根来寺が開かれている。

鳥羽上皇の菩提のために、皇女五辻斎院頌子内親王とその母春日局の発願によって東別所（小田原谷）に建立され、その時同時に頌子は蓮華乗院の維持費用として、紀伊国の南部庄の田 10 町を寄進している。春日局は徳大寺実能の養女で、鳥羽上皇の皇后、美福門院の女房となり、上皇の寵愛をうけて生んだのが、頌子（のちの五辻宮）である。上皇はことのほかこの母子を愛し、与えたのが秘蔵の所領である南部荘だった。治承元年（1177）、蓮華乗院は東別所（小田原谷）から現在地に移築された。蓮華乗院の勧進・造営・移築全てを引き

受けたのが西行で、頌子亡き後、南部庄全庄を寄進することを決めたのも彼の力であったと考えられている。頌子内親王３４歳、西行 60 歳の頃である。西行にとって、頌子はかつての主・徳大寺実能の孫であり、北面の武士として仕えた鳥羽上皇の娘である。この縁もあり、蓮華乗院勧進を行ったと思われる。
大会堂の東隣に建つ三昧堂は、最初は親王院の地にあって東南院とよばれた。この堂の修造にかかわったのが西行だとも、西行が蓮華乗院の勧進奉行としてこの堂に住んだとも伝えられ、堂前の桜は、西行桜と名づけられている。出家する前の西行が仕えていた徳大寺家の当主徳大寺実能は、鳥羽天皇の皇后、待賢門院璋子の兄であることから、白河院・鳥羽天皇に重用され、保延二年（1136）には、４１歳で大納言になっている。歌人としても優れ、西行が和歌に関心もつようになったのは、実能の家人となったことが大きかったと考えられている。また徳大寺家の従者だったことがきっかけで西行は、18 歳で鳥羽上皇の北面の武士となり、上皇の身辺警衛、御幸に供奉している。その時の同僚に同い年の平清盛がいたが、二人には身分差があり、清盛は位の高い上北面、西行は下北面であった。
https://blog.goo.ne.jp/mitsue172/e/15e8dd350d62e39b1b260efbeea98bbb
（注７）中世の遁世とか隠遁には、教団組織や宗派的ドグマ、更には世俗権力といったものに対して、肉体的にも精神的にも属さない自由と、それ故の孤独・孤高の立場というものがみられる。西行は高野山大伝法院流の開祖にして、院政期を代表する真言密教僧たる覚鑁の孫弟子であった。西行は覚鑁の弟子である兼海から伝法灌頂（阿闍梨位 灌頂）を受法した真言密教僧であった。さらに伝法灌頂（阿闍梨位灌頂）を受法している。密教の修道階梯を満行していた。西行が属したと考えられる大伝法院は、鳥羽院の政権と深く結び付いた覚鑁によって創建され、浄土教色の濃い高野山上における仁和寺の別所であった。大伝法院僧とは別所の聖人（上人）である。大伝法院は、遁世の聖人（高野聖）たちを傘下に収めていた。西行は、大伝法院方の事相の達者であった。西行は、密教の教義のみならず実践面（観想法や加持・修法といった祈祷）にも精通していた。（苫米地誠一「西行と大伝法院・仁和寺」）
（注８）平安の後期に数寄の遁世者が多く輩出した理由は二つあるといわれる。第 1 は貴族社会における身分・家柄の固定が・硬化がもたらした不満と絶望があった。第 2 は中・下級の貴族の中には受領を歴任したり荘園を領有したして富を積んだ者が多く、優雅な遁世生活を支える経済的な基礎があった。精神的には、体制に絶望し、物質的には体制離脱の手段をもっており、俗界の周辺で自由に遊ぶ生き方であった。西行の佐藤氏は肥沃な農地の預所を代々務めた家で紀伊田仲庄は、摂関（徳大寺家）の所領で佐藤氏は在地領主として経営を任されていた。西行の遁世は、仏道修行を行いつつも、自由な現世の数寄の世界の生き方であった。
（注９）熊野権現は、本地垂迹説の中で王権を守護する神として院政期の信仰世界に突如として屹立してきた神であった。『熊野縁起』にある通り熊野は伊勢の天照を神話言説の内に取り込むことで、これと同体化しつつ、更には伊勢をも超える神格への上昇を企図している。それは退位した天皇である上皇が天皇家の家長（治天の君）として権力を掌握する院政とい

う、新たな中世的権力・政治形態の登場と連動した宗教現象であった。院の熱烈な熊野信仰・熊野詣は、ただ後生を祈るばかりでなく、天照の子孫であり、また天照と「心身同体」の関係にもある王権守護神たる熊野権現への政治的・国家的祈願が含まれていた。平安末期宗教思想史においては、王統と仏統を共に受け継ぐことで、他に突出した正統性を体現する熊野権現という神格を生み出した者たちの、宗教的想像力と実践世界の内実があった。

（注 10）熊野に向かう道は大きく分けると 4 ルートあった。伊勢詣から熊野詣に向かう伊勢路、高野山から来る小辺路、修験者が吉野から駆けた大峯奥駈道、そして大阪から皇族が通った紀伊路から中辺路に抜ける道があった。

（注 11）「むしたれいた」とは、「むし」を垂らした「いた」のことである。「むし」とは、女性が市女笠の周りに垂らして外から顔を見透かされるのを防ぐ垂れ絹のことで、中世、熊野詣をする女性は、むしを垂らした市女笠をかぶり、顔を隠していた。熊野は浄土の地とみなされ、熊野を詣でるには「葬送の作法」をもって行なわれていた。女性参詣者がかぶった市女笠は、伊勢では葬送の際に女性がかぶったもので、死門への旅とされた熊野詣にふさわしい葬送の作法に則った装束であった。「むしたれ」には、それで外界を遮断するということから、浄土に生まれ変わるために、娑婆世界への道を遮断するという意味が込められていた。熊野を詣でる女性参詣者は自らを「イタ」と名のった。（熊野詣の道中、俗名を捨て男は「サヲ」、女は「イタ」、尼は「ヒツソキ又はソキ」、法師は「ソリ」と忌詞を用いた。」神子・仏子として熊野権現に向き合うためである。「イタ」は巫女で、女が「イタ」と名のることは、熊野詣の道中、女は熊野権現に仕える巫女であることを意味する。熊野は女性の参詣を広く受け入れた。熊野ほど女性の参詣を歓迎した社寺は他にない。

（注 12）黒染めの衣に笈を背負い、人跡まれな残雪の吉野山を行く姿が「西行物語絵巻」に描かれている。後世芭蕉はこの西行庵を訪れている。

（注 13）吉野山は大峰山脈の北端で，金峰山(青根ヶ峰)から北西方向につらなる約 8km の山稜である。大峰山の入口に金峰山修験本宗の総本山金峯山寺(蔵王堂)があり，また源義経や南朝ゆかりの史跡や伝承地に富んでいる。役行者によって蔵王権現の神木とされたという桜は，一山を埋め，千本桜が吉野神宮、如意輪寺、吉野水分神社、西行庵付近それぞれにある。

（注 14）「参詣日記」によれば、“熊野を目指す役行者は、罪崎河という正に罪業を象徴する名を負った河の岸辺で、「乱穢の不浄の血、路に満ち、人通はざる・・・」という強烈な不浄―穢れに遭遇する。行者は「深山参詣の志、これ不浄なり」と己の心の清らかならざることを省み、陀羅尼・心経を読誦すると、眼前の穢れは実体ではないこと、それゆえ「十重戒を持し」、更に「中臣祓」を読誦して罪崎河で沐浴することで「道も浄く身も浄し」との神託を得る。その後も執拗に罪業・悪業・業障に起因する所の不浄・穢れによって障乱されるものの、そのたび毎に祓を修し清浄性を回復して、行者は熊野参詣を成し遂げる。正に劇的な通過儀礼の物語化であり、熊野精進の縁起説話となっている。かくして、「中臣祓」をめぐって熊野―伊勢（仙宮院）が思想的に結ばれ、大峯山の熊野側を胎蔵界曼荼羅／吉野（金

峯山）側を金剛界曼荼羅に比定し、大峯抖擻を金胎両部不二の曼荼羅修行と説く。修験の思想が、伊勢（仙宮院）に齎され、内宮＝胎蔵界／外宮＝金剛界に擬えた両宮不二観を根本教理とする両部神道思想の形成を促したと見られる。修験と両部神道は極めて密接な関係にあり、密教僧西行は、そこを歩んだのであった。（萩原氏）

（注 15）西行は『御裳濯河歌合』の判詞を『千載和歌集』の撰者であった歌人・藤原俊成に依頼した。そして『宮河歌合』の判詞を、俊成の子の定家に依頼した。藤原定家は当時 25 才であった。のちに『新古今和歌集』の撰者になり、その『新古今和歌集』に西行の歌は 94 首（入集数 1 位）入るのであるが、その頃は定家はまだ侍従で、しかも事件を起こしたばかりだった。定家 24 才の時、大嘗祭の時に行われる五節の舞の夜、事件は起きた。酒席で源雅行から嘲られた定家は、思わず紙燭で顔を殴ってしまう。そして昇殿を禁じられ、蟄居させられた。父の俊成は定家を救おうと、時の権力者である後白河院に直訴状を出した。後白河院は俊成の願いを聞き入れ、定家は再び昇殿を許されたという。西行が『宮河歌合』の判者に定家を指名したのは、この事件の直後だった。「出世できないでことを悩んでいる私を憐れんでくださった」ことを書き記している。そして最後に定家の歌があり、それに対する西行の歌が載っている。

　君はまづ憂き世の夢をさめぬとも　思ひ合はせむ後の春秋　　（定家）

（あなたが今生の世を終えられても、また来世の春秋に思い出してくださることでしょうね、この歌合せを作ったことを）

　返し

　春秋を君おもひいでばわれはまた　月と花とをながめおこせん　（西行）

（春秋につけてあなたが思い出すのならば、私も月や花につけてあなたを思い出すことでしょう）